に此の地に出現を見てゐた日本人町の成立に伴ふ現象なりとして十七世紀初頭の文獻に初出する所以を說明し、以後前後三世紀二百年間に亙る此の名稱の存續理由に併せ及んでゐる。第二篇資料篇に載せられたイサーク・ド・フラーフ「カムボヂア及び附近圖」より以下十六葉を算する豐富な古地圖の寫眞版と合せて、日本河の全貌は之を述べて遺憾なきものと云ふべきである。

嘗ての先人の活躍の迹、僅かに零細な文獻に其の面影を殘すに止め再び忘却の陰裡に埋もり去りたるやの觀ありし東南アジアの史蹟を、今にかくの如くに確實に考證せられたことは、南方史研究其の物、若しくは之に對する興味と關心とを惹起せしむる上に其の功少なからざるは姑く言はずとするも、新しき時局の進展に一個の回想點を提出せれた、唯これ丈を以てするも十分江湖に推賞さるべき資格を持つであらう。

（四六版　本文三十三頁　圖版二十一　地圖一葉　富山房發行　定價參圓五拾錢）（愛宕）

現代史學

大類伸著

未曾有の世界轉換期に生を享けた我々――しかもかゝる世界史的時期に歷史の學を專門の業として選んでゐる我々にとつて、史學が現代に於いて如何にあるべきかを考へることは、單に專門の學の內部的必要から生れて來た原理的な課題であるにとどまらない。それは必然的に、我々が歷史の學徒として現代を如何に生き拔くべきかといふこととも關聯せざるを得ないが故に、歷史學が現代に於いてあるべき姿を考へる事は、我々の全存在にかけられた現實的實踐的な問題――しかし同時に我々の生そのものにかけられた內面的問題でもあらねばならない。特に從來我國史學界に於ける歷史理論及び史學思想方面に於いて西洋史學が有して來た特殊な意味を思ひあはすと、今日我國西洋史學徒に課せられた任務のいよいよ重いことが、痛感されずにはゐられないのである。かかる意味に於いて、我國西洋史學の泰斗大類伸博士が最近十餘年間に發表された舊稿に更に推敲を加へられて、補筆改訂の上、「現代史學」と題して一書を刊行されたことは、その意義決して尠しとしないのである。

然しながら、歷史學が如何にあるべきかを考へるためには、先づそれが近き過去に於いて如何にあつたか、そして現代に於いて如何にあるかを省みねばならないであらう。過去を背負つた現代を先づ眞に理解し得てこそ、始めて未來に於いて行くべき道が打開されるといふべきである。それ故、本書の一部もまた近き過去への回顧に宛てられねばならなかつた。卽ち、全部で七篇收錄されてゐる論稿のうち、その第七「本邦に於ける西洋史學の發達」と第二「西洋歷史思想の性格」とがさやうな意味をもつてゐることは勿論、更に第三「政治史と文化史」、第四「現代歷史觀と精神史」及び第六「最近西洋史界の動向」のそれぞれが、少なからざる部分を歷史的回顧のために割いてゐるのである。尤も後の三者に於いて

は、著者の視角がより多く現代に向けられてゐることは云ふまでもない。恐らく此の部分が本書の中核を形成してゐると云へるであらう。其處に於いて著者は、十九世紀後期以來の文化史と政治史との對立を精神史の立場に於いて揚棄せんとするマイネッケに可成り接近しながら、然しこゝにも安住し得ない現代歴史思想の暗さと動搖を指示されてゐる。そして、このあたりに著者自身の史觀が折にふれて顯現するかの如く感じられる。その點から云ふと第六論文の第七節「民族的復興と運命觀」並びに第五「歴史に於ける自由と運命」(講演)は、本書中最も興味ある部分であるとも云へるであらう。尤も別に著者自身の立場が其處で特に強く主張されてゐるわけではない。然し讀者は、第三より第六の論文に至る部分を通讀することによつて、現代に於ける歴史學の多樣なあり方と多難な行路とをまざまざと眼前にもちつつ、その背後に常に著者自身が大きく浮び上つて來るのを感ぜずにはゐられないであらう。

讀者の側から云へば、第三、第四及び第六——特に第三の「政治史と文化史」のあたりが、やや西洋史學の專門的知識を必要とする部分でもあらうか。これに對して、第一「教養としての歴史研究」並びに第二、第五のあたりは、一般教養向とも云へるであらう。かやうに、本書各部分の成立の事情が一樣でなく、著者が十餘年間の色々の機會に種々の動機で執筆されたものの收錄であるために、各部分に於いて程度が同じでないばかりでなく、また重複したところも往々にして見受けられる。然しながら、本書の各部分を一貫して流れてゐる意識、或ひは精神に至つては、同じである。卽ち、本書のもつあらゆる參差不同にも拘らず、それを貫いてゐる一本の樞軸は、實に現代の意識である。若々しい現實の感覺である。これあることによつて、本書は生命を得てゐるとも云ふべきであらう。我國の西洋史學界を代表されてゐる老大家が、同時に最も若々しい歴史的感覺の所有者であることは、讀者をして一驚せしめずにはおかないであらう。その點、現代と歴史學、或ひは現代史學といふ如き問題を論ずるに、著者を措いては他にその人を見ないと云ふべきではなからうか。

單に史學の專門家と云はず、一般に歴史の學に何ほどかの關心を有する人々、或は更に廣く、現代を歴史的に生き拔かんとする人々の座右に、敢へて本書を薦むる所以である。(弘文堂發行B6判　定價貳圓)。(中山)

回教概論

大川周明著

大東亞戰爭の進捗するに伴つて、我が國民の視野は自ら弘められることになつた。而して、これに對應する努力が各方面に於て進んで拂はれて居る次第である。素より、今さら早急に知識が攝收されなければならないと謂ふが如きは、所謂、泥繩的の誹りを受けるべきかも知れないが、過去の迂濶さを徒に責むべき時でない。否、寧ろ、遲れ走せながらでも、正しい認識を國民に與へる